

[成果情報名]カキ「刀根早生」の十字型汚損果Ⅱ型果（通称：バツテン果）の特徴

[要約]カキ「刀根早生」の十字型汚損果Ⅱ型果は、満開 30 日～60 日後頃に旺盛に肥大する果実に多く発生することから、被害軽減にはこの期間の果実肥大を抑制する必要がある。

[キーワード] カキ、十字型汚損果、バツテン果

[担当機関名] 果樹試験場 かき・もも研究所 [連絡先]0736-73-2274

[部会名] 果樹 [分類] 研究

[背景・ねらい]

本県のカキ主力品種「刀根早生」は、年や園地によって十字型汚損Ⅱ型果（通称：バツテン果）が多発して問題となってきた。さらに、価格安定対策の一環として、早期出荷のために推進している側枝単位のはく皮処理技術は、障害の発生を助長している。そこで、早急な要因解明と対策技術の確立を目的に本研究に取り組んだ。

[成果の内容・特徴]

1. 障害は斜線溝に沿って小黑点が密集する（写真1）。障害は表皮組織に限られる（写真1）。組織学的な観察によると障害は表皮組織に限られ斜線溝の左右が黒く変色しているが、果皮および果肉細胞に崩壊はみられない（写真2）。
2. 障害果の発生および果実の障害程度の進展は満開後 95 日頃（8月下旬）から満開後 115 日頃までの約 20 日間に増加する（図1）。また、CTSD 脱渋処理後 5 日目においても障害の進展はみられない。
3. 障害果は正常果（障害なし）に比べ満開後 30 日～60 日頃の果実横径が旺盛に肥大する。しかし、障害程度が中以上と微少の果実肥大は大差ない（図2）。
4. 満開後 30 日目の側枝はく皮処理では、葉果比が高い処理区で大果となり障害発生果率が高かった（図3）。一方、時期を違えての果実肥大促進処理を行ったところ満開後 30 日で障害の発生が最も多く、満開後 50 日、73 日と処理時期が遅い処理区で障害果の発生が少なかった。また、無処理枝果実の障害発生果率は満開後 29 日に仕上げ摘果を行った無処理（葉果比 20）区でやや多かったが、ほとんど摘果を行わない葉果比 10 区では葉果比 20 区の約 1 / 3 と障害発生は少なかった（図4）。

[成果の活用・留意点]

1. 障害果軽減のための基礎資料として利用できる。
2. 今後、満開後 30 日～60 日頃の果実肥大抑制による障害果軽減技術の実証を行う予定である。

[具体的データ]



写真1 「刀根早生」障害果

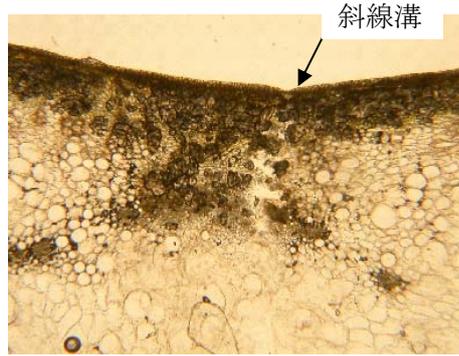


写真2 障害果断面 (×40)

注) 協力: 岡山大学農学部果実発育調整学研究室

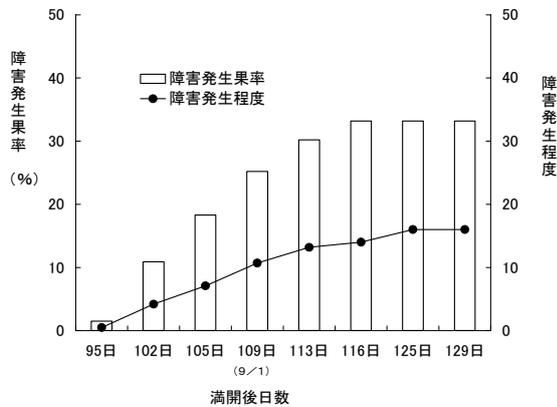


図1 はく皮処理枝の障害果発生率と発生程度の推移

注) 調査果実: はく皮処理した側枝着生の202果

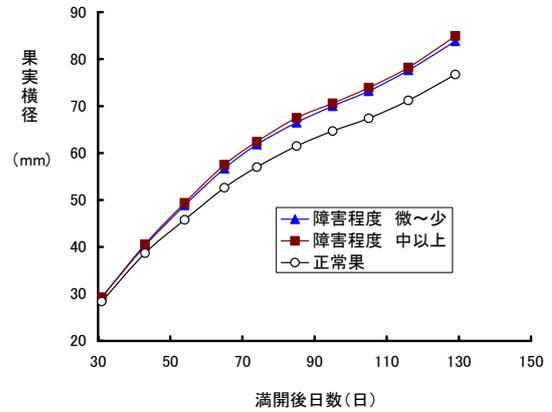


図2 障害果(程度)と正常果の肥大の推移(2005)

注) 障害程度は障害部位が概ね直径1.5cm以内に収まるものを微~少、収まらないものは中以上とした。

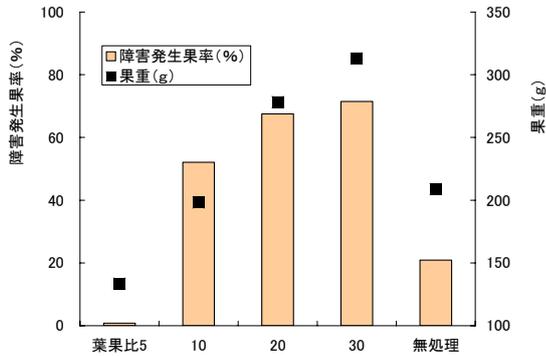


図3 はく皮処理枝の葉果比と障害発生果率および果実重

注) はく皮処理: 径2~3cmの側枝基部を満開後30日目に環状はく皮処理

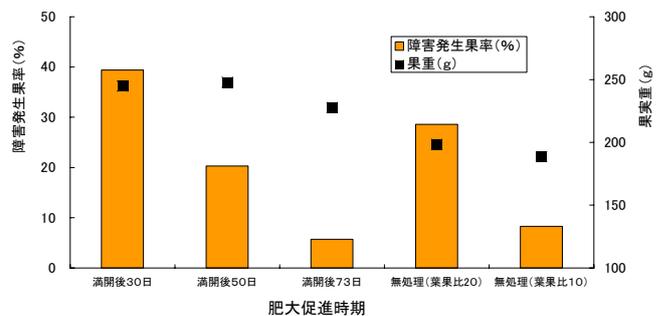


図4 果実の肥大促進処理時期と障害発生果率および果実重

注) 果実肥大促進処理: 側枝の環状はく皮+摘果 (葉果比10~20)
無処理区の仕上げ摘果は満開後29日目

[その他]

研究課題名: カキ「刀根早生」の十字型汚損果Ⅱ型果皮障害の発生要因と対策技術の確立

予算区分: 県単

研究期間: 平成17年~

研究担当者: 和中学、角田秀孝

発表論文等: なし

